
魔王始めました -そして伝説へ-

怠惰なマヨネーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王始めました - そして伝説へ -

【Nコード】

N6700S

【作者名】

怠惰なマヨネーズ

【あらすじ】

魔法と魔物が飛び交う世界、そこに突然として現れていた青年。

呼び起こされる過去の記憶（邪気眼）封じられし伝説（中二設定）
そして開放された力（何故か）

過去の忌まわしき伝説によって生み出された使い魔『レド』と共に、
世界を暴れまわる！

「え？勇者？何それ？

私は平穩に魔王として過ごしたいだけなのに！」

理不尽と勘違いが巻き起こす波乱の魔王誕生伝説！

巨匠：怠惰なマヨネーズ推薦（自称）

ソウルフルギャグ魔王戦記！この作品を読むのに必要なのは気合です。

プロローグ(前書き)

世界は某オタク話と一緒にです。

プロローグ

「…………え…………？」

周囲の異変に気づき私は愕然とした
そこにあつたのは凡そ自分の記憶には微塵も存在しない光景
そして何より、こんな場所に突然立っていると云う現実
さらに説明不可能なこの生物

「ボクと契約して魔法少女になつてよ！」

「…………私は男だが」

半透明の小さな黒猫が宙に浮かんで人語を話してきたのだ
当然ながら私はまず自分の頭にコブがないかなどの確認をする
掌で頭を触ってみたものの、別にいつもと変わる事はない
てつきり頭をどこかにぶつけておかしくなったのかと思つたが、そ
うでもないようだ
一方こちらの心情など知る由もなく、変わらずその奇妙な小動物は
私へ声をかけてきた

「大丈夫だよ！今なら男の娘だつて需要があるんだから！」

「私は今年で20だぞ」

その飛び出す奇抜な単語の意味を理解してしまえるのが何とも悲し

くは思えるが

小動物の言うような対象に値するかと言われれば、答えはNOだ
身長は178と割かし高い部類に入る上、女性顔でもない
むしろ三白眼のおかげでガラの悪い事この上ない私がそんな意味不
明な物になれるかっ

……というか、この問答を続けたとして何の意味も無い事に私は気が
がついた

そう、求める答えはもっと別なのだ

「おい……お前が私をここへ連れて来たのか？」

私は小動物を睨みつけながら様子を伺った

やはりその言葉に何か重要な事があったのだろうか

今までただ笑顔を浮かべていただけの小動物は、歪に口元を吊り上
げていた

「何を言ってるんだい、キミがボクを作ったんじゃないか」

「は？」

今しがた小動物から放たれた剛速球は、出来ればそっくりそのまま
お返ししてさしあげたかった

私が、作った？

自慢ではないが、私は昔から手先が不器用だ

小学校の図工で作った自分では改心の出来だったペンギンの粘土に
先生のタイトル追記で「ゴジラ」と書かれるほど不器用だ

精々技術的な物で生み出せると言えば、ラクガキ程度に練習してい
た絵くらいの物だが……

「……………」

「……………」

私は一瞬にして脳内にフラッシュバックした映像を心の深くへと閉じ込めた

有り得ない……………嘘だろうか……………？

「そう、ボクは『貴方』によって作られたんだ」

「やめる……………」

その姿を改めて見れば、確かに私の記憶と合致する
だがしかし、夢であってくれ

「『貴方』は一人、部屋の中でその方法を模索しながら……………」

「やめる！やめてくれっ！！」

だってそれは

！！

「『闇の書』でボクを生み出した……………そうでしょ？【永久の漆黒】」

ノスフェラトウ・グラフィイト？

「うわあああああああああー！！！」

封印されたはずの黒歴史だった

大学ノートの表紙に、マジックインキで書かれた『闇の書』の文字が脳内に蘇る

その瞬間、私の中に生まれた感情は自殺願望だった

「やめてくれ……お願いだ……契約でも何でもするから……っ」

「あれ……そんな簡単でいいの？【永久の漆黒】様」

「やめる！やめてくれえええ！！」

私はこの日、生まれてきた20年間の中で初めての『ガチ泣き』を体験した

「ところで……契約とは……何をするんだ……『レド』」
「ボクの名前も思い出してくれたようだね、マスター！
でも折角だからボクも二つ名を貰えないでしょうか！」
「……お前はそのままが一番だ」

封じ込めたはずの黒歴史を暴かれてるだけでも、既に限界だと言うのに

その会話をしている相手が自分の生み出したキャラだとは神よ……これは一体何の罰ゲームなのですか……

「まあ、さつきは思い出して貰おうと思って“契約”なんて言葉を使いましたが

平たく言えば、マスターには一種の覚悟をして頂きたいんです」

「……覚悟……？」

お前が私と会話をしているのも理由の一つなのか？」

そこまで告げると、レドは『流石マスター！』等と興奮気味に鼻息を荒げた

しかし改めて見ると、我ながらこれは酷い

どう見てもその当時影響されたCCSのケロちゃんの羽に、好きな黒猫くつつけただけではないか

オマケに黒猫が好きな理由は………もう嫌だ、過去の自分を亡き者にしてやりたい

「まず説明する前に言っておかないといけないのが

この世界は、マスターの住んでいた世界とは別の世界だって事かな」

「……そうか」

もう今更驚く事はない

と言うより、最大の山場がOPどころか上映前のCMで流された気分だ

多少の事が起きてもそうそう驚けないような気がする

「そしてボクは今、この世界のとある物質とマスターの“魔力”で動いています」

「……魔力？」

驚かないと決めた次の瞬間には、もう身体がピクリと反応してしまつた

また黒歴史の話かと考えたがレドの様子からは冗談が伺えない

「正確には、マスターから放たれた魔力を軸として、とある物質を媒介に動いてるんだよ

だから本来ボクが知り得る事が出来ない情報もその物質に残っていた記憶を読み取る事で知識にしてるのさ」

「待ってくれ、意味がわからない」

そうとも、確かに私は先ほど晒してしまつたような黒い歴史を持っているが

あの頃望んだような物は何一つとして持ちえているわけがない
私は単なる大学生に過ぎないのだ

にも関わらず、突然異世界にいた、と言う事は視界に入る情景と目の前にいるレドから理解せざるを得ないのだろうが

『魔力』などと言う中二病全盛期の発動キーなんて私が有しているはずもない

「勿論マスターの気持ちもわかるけど

事実ボクは今こうしてマスターの力を受けて存在してるんだ」

「……じゃあ本当に」

「ボクも突然生み出されたから何が起こったかまではわからないけど
少なくとも、マスターは確かに魔力を持つてるよ」

正直複雑な気持ちだった

過去にあれほど願い焦がれていた物はけして手に入る事のない物だった

だからこそ自分の所持していた世界との決別を決めて

全てを封印し、大人になったのだ

それが、望まなくなつた大人へ変わった途端手に入るなんて
あまりに皮肉じゃないか

「……レド、この世界で言う魔力の概念は？」

「流石マスター、眼の付け所が一般人とは違うね」

「いちいち茶化さなくていい」

「はいはい、魔力の概念はマスターの持つてる知識と同じように、
個々の持つ……まあスタミナみたいなものだね」

「その辺りは私達の世界も異世界も変わらないんだな」

「人の持ち得る力、と言う意味ではそうだね」

たとえそれが私の知っている異な力だとしても

それを扱う物の定義が人間である以上、限界もあるのだろう

「では……“魔力”を“作用”させる事は出来るのか？」

「うん、可能だよ、それは所謂“魔法”って物になるみたい」

魔力に次ぐファンタジーな言葉『魔法』

いかにそう言った世界に疎い人間でも、誰しもが必ず一度は耳にする

まさか抱いていた幻想に相對する日が来るなどとは思わなかったが
……

「魔法か……」

「でも魔法を使用するには、当然だけど一定のルールがあるのさ」

「ルール……たとえば？」

「魔力はそれぞれ3パターンあり、それは色でもあり属性でもある」

「……よくわからん」

説明が単純すぎたのか、私の頭が悪いのか

ともかくよくわからないので掘り葉掘り聞いてようやく理解できた
つまり、魔力は私の知っているような『魔法の源』と言った何でも
要素の事ではなく

この世界の魔力には『属性』が最初から決められているらしい
それは人によつて違う物で、火の魔力を持っている物はそれ以外を
使えない、と言つた事だつた

「炎を象徴する『赤』 水を象徴する『青』 地を象徴する『黄』

これがこの世界で使われる魔力だね」

「なるほど……しかし、三原色だけか、思つたより少ないんだな」

魔法や魔力に対する感覚はゲームやアニメなんかである程度理解は
ある

それだけに3種類の魔法だけ、というのは結構意外な物だつた

火、水、地と確かに揃つてるのは揃つているのかも知れないが……

「そう、これは先天的に持てる色なんだ」

「……ん？口ぶりからして、後天的に使える色が増えると言つ事は
あるのか？」

「流石マスター！理解が早くて助かるよ！」

毎度毎度そう持ち上げられるのはむしろ痒さを感じるが、ひとまずそれは置いておこう

説明の続きを聞く限り、最終的な色の数は

『赤』と『青』が合わさった『紫』

『青』と『黄』が合わさった『緑』

『黄』と『赤』が合わさった『茶』の追加3種類が存在するらしいただ、混ぜられた色においてのみ、属性の優れた方に色が傾くとか

……

赤紫とか青紫とか

「……と言う事は、『紫』の魔力を持つてる者は『火』と『水』さ
らに、『紫』の属性が使えるって事なのか？」

「残念ながら属性そのものは増えないみたいだね、属性同士を組み
合わせる事で擬似的に作り出す事は可能みたいけど」

水の魔力と火の魔力を組み合わせれば、相反する二つの力が爆発し
て暴風を生み出す

なるほど、これは術者の応用次第でかなり用途が変わるみたいだ
……ただ、そうなるともう一つ確認しておかなければならない事がある

「……この世界においての魔法と言うのは

術者が術式を生み出す物なのか、既に存在する術式を使用するの
かどちらなんだ？」

これはかなり重要である

存在する術しか使えないと言う制約があれば、確かにそれは魔法だ
それに対して、火の属性が使える者が自分で術を作れるのなら、そ
れは認識として超能力と言う言葉の方がわかり易い

おまけに後者であれば、これは無限に近い使い方が出来てしまうだろう

「いい質問だよマスター『術式』と言う言い回しも昔のマスターを思い出すようでワクワクするね」

「茶化すなど言ってる……」

「マスターの考えた通り、この世界の魔法は既に解明され、存在してる術式を使うんだ」

さつきは『組み合わせる』なんて軽く言っただけど、これがかなり難しいからね」

やはり思い通り、そう簡単に扱えるような代物ではないらしい
多少残念な気はしたが、持ちえた能力を私がフルで扱えるわけがないのだから

むしろ先人達の残した技法を教えて貰える事に何ら抵抗はない

「……なるほど、概ね理解した……」

「……ホントに？」

レドはこちらへ向けて言い様のない笑みを向けていた

……流石は私の魔力に生み出された者、当然ながらバレルだろう

「いや……最後に1つ質問がある」

「知りたいのは、マスターの魔力が何色か？って事でしょう」

「……ああ」

3種あるうちの1つの魔力

それは本来手に入れるべきタイミングは生まれた瞬間のはずである
しかし、私に関しては魔法や魔力などが存在しない外側の世界から訪れた

その私が持ちえた魔力は一体どうなっているのか、気にならない方がおかしいだろう

「マスターの希望は何色なの？」

「……赤……火だな」

なるほどなるほど、と言った具合で楽しそうな笑みを浮かべるレド自分で確認できるならこんなまどろっこしい事はしないのだがまだ私はこの世界の魔力の在り方を知っただけだ
自転車の乗り方を知ったからといって乗れるわけではない

「……早く言ってくれ」

「そうだね、マスター……この世界で生み出される魔力の色が何故3つだけなのかわかる？」

「……………?」

やっと知れるのかと思った瞬間にまた問答

こいつは何故こうも面倒なやり取りが好きなのか

……ああ、私がそう言う設定にしたんだっとな

しかし何故最大が6つなのか、それを問われれば答えは単純に考えたら1つしかない

「……それは、三原色しかないのならそれが色としての限界だろう、作ろうと思えば後一色しかない」

「……その色は？」

私が答えを告げた瞬間、レドの表情から笑みが消えていた
そこから察するに、私は知りたかった答えを告げていたのだろう

「……………黒か」

「正解だよマスター」

それは今までの魔力に関する知識を根底から覆す
存在するはずのない色を私は纏っていると言う事になる

「マスター、貴方はこの世界での異質だ

魔王だって目指せるよ」

レドからぶっ飛んだ言葉が聞こえてきた

何を言っているんだコイツ、と呆れるはずの私の顔は

口元が自然とつり上がっている

この瞬間、封じられたはずの私の時間は……静かに開かれた

第一話『魔王誕生』（前書き）

2つも同時進行して果たして身体持つのかしら

第一話 『魔王誕生』

レドから一通りの講義を受けた私はひとまずこのジメジメした場所から出る事にした

ちなみに私とレドが出会った場所は見るからに洞窟の内部で周囲に光を放つ石などがあつた為に今まで周辺が見えていたしかし、少し進んで見れば嫌でも気づく

光に満ち溢れていたのはその一角のみで当然洞窟内は真っ暗だオマケに足場の悪い洞窟を素人の私がスニーカーで歩くには危険が孕むため

何か方法は無いのかと問いて出た答えが『飛んだら？』と言う、それこそ飛んだ意見だつた

やり方は魔力を放出して身体を浮かべると言う、所謂ホバークラフトしかしそれだとすぐに魔力が尽きるのでは無いかと聞けば放出した魔力を身体へ戻しながらやればいいとの事だつた

レドからの説明を受けながら2時間

ふらふらと不安定ではあるが何とか浮遊させるに到つた

ちなみにこれは魔法ではないらしく、魔力を使用した一種の応用らしい

闇への対策はレドの知りえていた魔法を一つ使用する事によって何とかなつた

それが私の周りをクルクルと回っている火の玉

赤の魔法、初級術『フレイム』

説明は受けていたが、実際自分の手から炎が出ると言うのはかなりの驚きと感動があつた

少しずつではあるが私も魔法に魅せられていたんだろう

そんなこんなで洞窟内を進む事10分
あまり広さは無いものの、枝分かれした道に混乱し
散々迷った挙句、たった今6度目の行き止まりへと辿り着いた

「……また行き止まりか」

闇に染まっていた奥が炎に照らし出され、その全貌を明らかにする
前に私はため息をついた

今のこの世界の時刻が何時なのかは果たしてわからないが
奥を見る前に理解してしまった、外へは続いていないと

つい数分前辿り着いた枝分かれ箇所を思い浮かべ、その道に引き返す
どうにも昔から私は籤運がない、その枝分かれも4つあったうち
現在を含めて2度行き止まりに突き当たった

この時点でお分かりだろうが、うち1つは私が元々から歩いてきた
道になる

よーするに、最後の一つが正解ルートなのだ

思わずため息が漏れる物の、まあ残りの一つが確実に外へ繋がって
いるのだから

そう言った意味では周囲を伺ったり考えたりしないだけ楽なのだろ
うが

『……マスター』

「む!？」

突然脳内に木霊する聞き覚えのある声

本当に何の脈絡もなく唐突に来たが為に、思わず驚いて周囲を伺っ
てしまった

恐らくこれはマンガやアニメでよく聞く『念話』と表される物だろう

『……こ、こっか……?』

『お、そうです、説明する前に使用できるとは流石マスター』

『……まあ体験したのは初めてだが、知ってはいるからね』

自らの身を持って使う日が来るとは思わなかったが

中々これは思ってたより便利だな

ワイヤレスのイヤホンのような感覚で使える

『で、どうした?』

『ああ、ルートはわかったみたいだし、それまでにマスターがこの世界でどうしたいかを聞きたいかな』

来た道を戻りながらレドと念話を続ける

しかし、どうしたいか……と言われてもな

何故ここに私がいるのか、そしてどうすればいいのか
逆に私が問うてみたいのだが……

『世界の有り様が変わろうと、どんな場所にだって“役割”って物がある』

だから、マスターがどうなりたいたいのか聞きたい、なるうと思えば
何にでもなれる、その力をマスターは持つてるんだよ』

『……有り様か……』

そう聞かれて私は思わず考える

幼き頃から憧れていた、戦隊物のヒーロー……に出てくる悪役

何より私の黒歴史が表している通り、昔からヒーローが好きだった

愛や友情や勇気で苦境を乗り越えるヒーローに比べ

地道な努力をし、多人数でボコボコにされてもめげない悪役達のな

んと凡庸で紳士的な事か

根性だけでは覆せない状況もあるだろうに

昔からそう思いテレビを見ていた私は相当に捻くれ者だったのだらう、それは否定しない

『……………魔王でも始めてみようか』

『おお！さすがはマスター！冷やし中華と同レベルで魔王の開始を語るとはね！』

そんな風に答えてしまう辺り、自分的にもある程度決めていた節はあるのだらう

レドとの念話でそれを再認識できた

何より、今の自分は魔力を得たとは言え、使用するためには努力や経験が必要である

陰で必死こいておきながら人々の前ではそれを微塵にも出さない、これは懂れだった

二十歳にもなつて黒歴史を開放する事になるとは思いもしなかったがまあ……………口だけにならない事が出来るのだからそれはいいだらう

『よし、今日を持って私は魔王となるう』

『いよ！待つてました！それではまず第一にあそこにいる少女をボロボロにしようよ！』

『……………少女？』

レドの言葉に私は周囲を見渡した

考え事に夢中になっていた為か、自然にも引き返していた最後の通路を通っている

そしてそこから少し進んだ場所で、確かに一人の少女がしゃがみこんでいるのが見えた

少女の正面には、石で作られた墓石のような物が建っている

『……………見る限り、まだ外には遠いようだが……………』

『迷い込んだんじゃない？もしくはあの墓石みたいな物にお祈りに来たとか』

浮遊したまま少女の方へ進んで見ると、風の流れか炎の明かりか私の存在に気づいた白髪の少女は驚いたような眼でしばしこちらを見ているが

すぐに目つきを鋭い物へと変え、私にまるで傳くように瞳を閉じた

「×？」

「……………む？」

少女が何かを呟いた、ここで私は当初から抱いていた僅かな不安と直面する事となる

そう、言語の壁である

彼女の発した言葉が『この世界でも異質』な言葉なのであればそれはわからないのだろうか

恐らく雰囲気から見て、口から放った言葉はこの世界での共通語なのだと思うれる

そうなると聊か面倒な事だ

レドとの会話が成立していたのは、恐らく彼が私の魔力を受けて生まれた者だったからなのだろう

しかし彼はこの世界の知識を得ていた、ならば通訳を頼む以外にこの世界での意思疎通は不可能となる

『レド』

『……………あー……………マスター……………ゴメン』

『……………なんとということだ……………』

最後の望みも空しく消えた

しかし考え方によつては一種の幸運でもあるだろう
この世界の住民には私が何を言っているのか理解できない

「ククク……脆弱な人間よ、我が前によくぞ現れた……」

『あー……マスターノリノリだねえ』

「……？」

しかしこれではラチがあかない

会話が理解できないのなら、自分をどう魔王だと認識させればいいのだろう

それを考えているうちにレドから物言いが入る

『とりあえず、この子をフルボッコにしちゃえばいいと思うよ！』

『……いや、彼女に直接危害を加えてしまったら、伝令役がいなくなる』

『なるほど……じゃあ、この子がお祈りしていた墓石をぶつつぶしてしまえばいいんじゃないかな？』

大事そうにしてたし、と言つレドに私は頷いた

まあそれくらいなら初の魔王様の仕事としては丁度いい

何より私は女性が苦手である、触れるのも正直勘弁願いたい

そうと決まれば彼女の目の前にある墓石への攻撃をしたい所であるのだが

『……どうすればいいんだ？』

『あー……単純に壊すだけなら魔力をブーストさせてパンチでもいいんだけど』

そこで着目されたのは私の周りをグルグルと回っている火の玉だった
周囲を明るくするためだけに生み出された魔法だったが

少女が持っているランタンを見る限り、今は特に必要としない
それならば、これをそのまま攻撃に使えばいいとの事

生み出す時と違って、要するにコレをそのまま墓石にぶっ飛ばせば
いいのだから

魔力を噴射&リリースしている現状を考える限り同じ事なのだろう

「人間よ、その眼で己の無力さを嘆くがいい」

『さあ、やっちゃんえマスター!』

しかしここで一つ問題が発生した

私の周囲で回転していた炎を操り、墓石にぶつけた所まではよかつたのだが

初めての事で今ひとつ魔力を操りきれていない私は、本来墓石までの移動を目的とするのに対し

付与させる魔力が異常に多すぎたのか、炎が墓石にぶつかった瞬間内側から猛烈な輝きを放ち、墓石は黒炎を巻き上げ爆散した

後々から聞くとところによるとそれは、赤の魔法、初級応用術『バースト』と言う物らしいのだが

そんな事を知らない私はあまりの勢いにただ呆然と立ち尽くすのみだった

「……?!?!?」

『マスター、呆けてる場合じゃないよ、女の子が何か言ってるんだから決め台詞的な物を……』

「あ……く、クツクツク……大事な物を壊されて悔しいか?精々己の無力さを嘆くんだな!」

レドから念話で『嘆く無力さは2回目だよ』と言うツツコミが入るがそこは気にしないで欲しい

どうせ何を言った所で彼女には理解できていないのだから

とりあえず自分の起こした所業と、あまりの爆発規模に洞窟が崩れないか不安になったが
こちらに何かを訴えかけようとしている彼女に向かって掌を2度シツシツと振る

呆然としていないで私の事を周囲の人間へ大いに話して欲しい
これ以上言葉を話しても無駄だと言う意味合いを見せる為に私は背中を向けると魔力を身体から生み出した
果たして他人の魔力が視覚にて確認できるのかどうかは定かではなかったが

魔力を色で現されるくらいなのだから、きっと出来るのだろうと半ば強硬手段だった

「 + ……」

再び何かを呟いた少女は私の意思を汲み取ってくれたのか
何度かこちらを振り向いていたようだったが、そのままその場から駆けて行った

さあ、ここから私の伝説が始まるのだ
クッククク……精々足掻くがいい脆弱な人間共よ……

『マスター、浸つてるところ申し訳ないんだけど』
『……………なんだ……………?』

私は少々不躰に念話を返す
やっと吹っ切れて魔王としての第一発目だったと言うのに
少しは余韻に浸らせてくれてもいいじゃないか

『マスターの魔力に感化されてか、ボク達の来た方から魔物がいっぱいきたよ』

その言葉と同時に辺りを赤い眼の大きなクモに囲まれた
……魔王登場のお祝いだといいなあ……

side リイン

「くっ……本当に行ってしまうのかい……」

「うん……仕方ないよ、私だけ特別ってわけには……いかないもの」

家の中でお婆ちゃんを説得しながら身支度を整える

身支度……とは言っても所詮は化粧だけなのだが

私の村では10年前から『嘆きの洞窟』と呼ばれる洞窟へ

年に1度、生贄を捧げる風習があった

これは魔物の動きが活発化した10年前

一人の魔術師によって大量の魔物が魔石に封じられたのだと言う

その封印の効力を再度発動させる為に必要なのが、人の血なのだから

過去に幾人かの魔術師が訪れ、魔石に対峙したらしいが未だに一人も戻ってこない

村の戦士も抵抗してみたらしいが、2日後ほぼ壊滅の状態で1人だけ帰ってきたと言う

「それじゃあ……行って来るね……」

「おお……神よ……」

お婆ちゃんは泣きながら私を見送った

私は今日まで泣きつくせるだけ泣いてきた

だからせめて最後までは覚悟を決めるんだ
誰にも迷惑はかけたくない
最後までくらはいは……静かに一人で……

洞窟の入り口へ着いた、手元のランタンが辺りを照らすと
まるで獲物を待っていた口のように見えて私は身震いした
しかしもう迷っているヒマはないのだ

ここで私が逃げてしまったら……村の皆に被害が及ぶ
折れかけていた心を再度奮い立たせ、私は一步を力強く踏み出す
もう折れる事のないよう、立ち止まってしまふ事のないよう
ただ、一步一步を踏みしめ、確認するように進んでいった

辿り着いた先には墓石のような物が建てられていた
更に奥があるようにも見えたが、きつとこれが噂に聞く魔石なのだ
ろう

私は覚悟を決めると、最後の時間だけは祈りに費やす事にした
膝を折り、その場へしゃがみこむと
両手を重ね合わせて祈りを捧げた

……もうこれ以上……誰かが犠牲になるなんて考えたくない
だからどうか……自分で最後にして欲しい……

隣へ置いていたランタンに燈っていた火がジジッと燃える音がする
どれほどその場で祈っていたのだろう

不意に洞窟の奥から風が吹いてきた

しかしその風はどこか不自然で、何か不思議な感じがした
全てを諦め、全てを受け入れたと言うのに

私にはどこかまだ、未練があったと言うのだろうか……

闇から現れたその漆黒の風貌を見かけ、思わず私はたじろいでしまった

……これで……村は救われるのなら……

「……貴方が……この主ですか……？」

「……x？」

私が言葉を投げかけると不思議そうに男は揺れた

男の周囲をクルクルと回っている炎と、浮いている事を見て

一瞬魔術師かとも思えたのだが、まさかこんな場所にいるはずもない私の問いかけには特に答えず、彼は何かを探っているように見えたとこちらが複数でいるかどうかでも確認しているのだろうか
しばらく沈黙が続いていたが相手は突然こちらへ向きなおした

「……x……」

「……え……？」

唐突に開かれた口と話された言葉は到底私の知っている言葉ではなかった

一瞬、魔法の詠唱かとも考えたのだが
それでもこちらの言葉ではない、むしろ全く聞き覚えのないニユア
ンスだった

彼が何者で、これから何をしようとしているのか

当然今ここに居るのは私と謎の男の2人だけだ

この状況から考えるに、私は彼にとって生贄でしかないのだろうか……
そう思っていた

「……」

再び吹き起こる風と、男の周囲を回っていた炎に変化が訪れる

しかし私はここで信じられない物を見る事となった

彼の言葉は恐らく魔法の詠唱だったのだろう

でも、黒い魔力が彼の周りに湧き上がる

そんなバカな

私は魔法としてのセンスが殆ど無いが、それでも知識としてくらい持っている

この世界で扱える魔法の色は6色しか存在しないと言う事くらい……
そして信じられなかったのはそれだけじゃない

漆黒の男が振りかざした炎が魔石に触れたかと思った瞬間

突然眩いばかりの閃光を放ち、爆発したのだ

「え……そんな!?!?」

私は咄嗟の事態に信じられず、自分の口元を両手で覆っていた

私達の村にとって忌むべき魔石

それは決して壊れる事がなく、幾人もの魔術師が犠牲となり

幾人もの村人が犠牲となってきた

その忌まわしき魔石が今、目の前で砕け散ったのだから……

しかしそれなら封じられていた魔物たちはどうなるの?

そう、今まで退治される事なく封じられていた最大の理由

それは魔物があまりに強大すぎたからだった

村に記された記録によると、その魔物たちは魔法が効かず、物理攻

撃も効かなかったとある

だからこそ封印を施されていたと言うのに

砕かれたからにはその封印は解けると言う事だ

目の前にいる漆黒の男は暗さ故に表情まで読めないが、何かをこちらへ話しているようだった

「貴方は一体……」

その問いかけに答える事もなく、再び黒い魔力を纏わせて私に背を向けた相手

まさか、封じられていた魔物と戦うと言うのだろうか

そんなことができるはずがないと言う思いが頭を過ぎったが誰も破壊すら出来なかった魔石を一撃で粉碎してみせたのだ

……もしかしたら彼は神が与えてくださった勇者なのかも知れない私は再び彼の背中を見ると、その背には何か自信に満ち溢れた物を感じた

「……………ありがとう、勇者様……………」

もう泣かないと決めていた涙は止め処なく頬を伝い落ちる

私は全力で洞窟から転がるように走った

誰でもいい、名も知らない彼の手助けをして欲しい……………！

ただ、その思いを胸に村へと駆けていった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6700s/>

魔王始めました -そして伝説へ-

2011年4月24日08時22分発行